

子どもたちはなぜ SNS にハマるのか

－ 2010 年代の SNS 利用とトラブルの動向－

Why Japanese children addict themselves to SNS?:

The SNS use and trouble trend in the 2010s.

若本 純子*

WAKAMOTO Junko

要約：本稿では、わが国の子どもたちに SNS が急速に浸透していった 2010 年代における SNS 利用とトラブルの動向を整理することを試みた。わが国において高校生の SNS 利用が 100% 近いと報告されるようになったのは 2015 年頃からである。2018 年頃からは複数の SNS やアカウントの使い分けが広がっていった。交流の相手は、現実場面で面識がある友人が主であるものの、Twitter や Instagram では趣味などを共有できる未知の相手との交流も盛んに行われている。SNS での子どもたちの交流では傷つき・傷つけを避ける一方、同期的な対話を面倒に思うなど、両価的な行動様式が見出されている。また、2020 年 10 月に教師を対象に子どもたちの SNS トラブル調査をしたところ、小学生では対人関係上のトラブルが報告された一方、高校生や中学生においては子ども間の性的コンテンツの送受信とそれに付随する人間関係のトラブルが報告された。

キーワード：SNS 児童生徒 友人関係 2010 年代

I はじめに

いまや子どもたちが親しい友人と交流する主な手段は SNS になりつつあると言っても過言ではない。しかし、子どもたちの SNS 利用の研究は難しい。その理由として、第一に、SNS アプリなどの流行は廃れるのも早く、利用状況が瞬間に変化してしまうことがある。畢竟、専門的な研究は追いつかない。特に、子どもたちの大半が有している LINE は、その使用が日本と東南アジアの一部に限定されていることに由来して専門的な検討がほとんど見られないのが現状である。そして、第二に、子どもたちは大人が思いもつかない利用の仕方を「発明」し、それが急速に広まってしまふことが挙げられる。昨今であれば、女子高校生が、位置情報アプリの Zenly を待ち合わせなどに利用するのみならず、友人が今何をしているのか確かめ、直接的な連絡をとらない時にも繋がりを感ずるために利用していることを挙げることができるだろう（鈴木、2020；高橋、2019 など）。

このように大人と子どもたちとの間で SNS 利用に対する認識は大きく異なり、利用動機の違いに立脚した突飛な利用の仕方が大人を驚かせる。保護者も教師も「ネットやスマホはわからない」「ネットネイティブにはかなわない」と子どもたちの情報行動にはお手上げ気味である。しかしながら、SNS が子どもたちの「日常」になったことは、児童期・青年期における重要な他者である友人との交流様式が変化したことを意味する。この変化は子どもたちの発達に多大な影響を及ぼすと予測され、情報化の進展以前とは異なる発達過程が見出される可能性がある（Bandura, 2016；boyd,

* 幼小発達教育講座

2014/2014も同様の指摘)。子どもたちのSNS利用に関する検討は直ちに着手すべき課題であるのと同時に、子ども特有の利用方法やその背景にある動機と背景へ注目し、子どもたちを取り巻く複層的な環境の影響を考慮していく必要がある。

本稿では、2020年という時代の区切りにおいて、筆者が2018年に行った文献概観に新たな文献情報やデータを加え、わが国において子どもたちの間にSNSが急速に浸透していった2010年代の動向について整理することを試みる。

II 子どもたちはなぜ SNS にハマるのか

1 子どもたちのSNS利用の実態と学校教育の課題

総務省（2020）の『令和2年版情報通信白書』によれば、13～19歳の子どもたちによるインターネットの利用率は飽和状態（98.4%）に至り、6～12歳においても8割を超えたことが報告されている。SNS（Social Network Service）利用については、6～12歳：2018年23.2%、2019年24.1%、13～19歳：2018年75.0%、2019年80.5%と増加している。SNS利用について詳細な分析が行われた『平成29年版情報通信白書』（総務省、2017）においては、10代（13～19歳）の子どもたちでSNSを利用している者は8割にのぼり、ネット利用時間の約7割をSNSに費やしていることが示された。このような子どもたちのSNS利用が極めて高い水準にあるという報告は、2015年あたりから報告され始めた（木村、2016；MMD研究所、2015；リスキーブランド、2017など）。

急速に進む情報化の波に背中を押される形で本格的に実施されることとなった情報モラル教育では、子どもたちが自分自身で情報を判断して行動できる力と態度の醸成を目標に掲げている。しかし、人間の判断というものは極めて文脈依存的である。SNS等ソーシャルメディアを介在したコミュニケーションも対面状況のコミュニケーションと同様に無数に存在する要因の影響を受けるが、要因の所在や影響の仕方は、子どもの認知発達や情緒発達、道徳観等の発達によって異なる。

現在、道徳教育においても情報モラル教育は重要な観点となっているが、教師からは「これはマナー違反、こうするのが正しいというやりとりに終始し、子どもに響いていない感じを受ける」という迷いも聞かれる。中橋（2017）も軌を一にして、学校教育において行われているSNS等について学ぶ実践・研究が、人を傷つけたり、迷惑をかけたりしないための心がけや、リスクから身を守る方法に限定されがちであることを批判している。実際、学校や自治体が行っている教育はSNS等によるコミュニケーショントラブルの防止に重点を置いているが、「～してはいけない」「～しなければいけない」というルールやマナーの指導だけで、子どもたちのインターネットトラブルの根本的解消につながるかには疑問が残る。

中橋（2017）はその打開策として、彼の専門であるメディア・リテラシー教育、すなわちSNS等ソーシャルメディアの特性や構造についての理解を深め、メディアと社会との関係を考慮し行動する力を身に着けることが必要であると述べている。しかし、リテラシーとは能力であり、これもまた認知発達と緊密に関連する。それにもかかわらず、世の情報モラル教育や情報リテラシー教育にまつわる書籍等は身に着けさせたい力とそのため教育方法論や教材開発が先行し、子どもたちの判断や行動の背後に潜む心理的状況や発達に対する関心が希薄である。

さらに、SNSが子どもたちのコミュニケーションチャネルの中心を占めつつあるという現状をふまえると、親しい友人との関係のあり方についての注目することが不可欠である。多数のティーンエイジャーとの面接調査によって、SNS等ソーシャルメディアをめぐる行動と心理を示したboyd（2014/2014）によれば、ティーンは、思春期・青年期固有の発達的な特徴として、親しい友人と楽しい会話を続けたいとの思いからSNSに没頭しているだけである一方で、ソーシャルメディアのさ

さまざまな特徴をコントロールできるのに十分な力を持っていないという。すなわち、子どもたちの中で日々生じている SNS 上のトラブルは、子どもたち側の心理的・行動的・発達の要因とインターネットの特性が交錯する中で起こっている。したがって、子どもたちが適切にインターネットを使うことを促進するためには、教師、保護者をはじめとする大人は、インターネットや SNS が、子どもたちのコミュニケーションと人間関係においていかに重要な位置を占めるようになってしまっているのかを、的確に理解することが欠かせないのである。

2 わが国の子どもたちにおける 3 大 SNS (LINE, Twitter, Instagram) 利用の変遷

boyd (2014/2014) は、SNS 時代の特徴的な現象として、子どもたちの現実世界と SNS やインターネットの世界が地続きになり、2つの境界が曖昧化したことを指摘している。具体的に説明すると、子どもが SNS で交流しているのは現実でも仲のよい友だちであり、現実でのコミュニケーションを拡大・延長あるいは補完する目的で SNS が利用されている。そこでの交流は、好きな友人と、好きなものを、楽しいことを共有・共感し合うことが主であり、現実と同様のリアリティをもって体験されている。こういった子どもの SNS 利用の特徴は、国内外の研究で共通して確認されてきた (土井, 2014; OECD, 2012; 鈴木, 2016, 2018; 若本・西野・原田, 2017 など) ことから、発達的な特徴としても理解することができるだろう。

SNS 利用についての詳細な分析が行われた『平成 29 年版情報通信白書』(総務省, 2017) によれば、10代 (13~19 歳) のうち何らかの SNS を利用している者は 81.3%, そのうち上位にあったのは LINE が 79.3%, Twitter 61.4% であった。

SNS 利用の歴史をひも解くと、2000 年代に入って以降、ブログ、写真や動画の共有サイト (YouTube など)、知識共創共有サイト (Wikipedia など)、SNS が次々に登場した。2004 年に Facebook (フェイスブック)、2006 年に Twitter (ツイッター) のサービスが開始された。日本では Facebook や Twitter に加えて、2004 年に mixi (ミクシィ) や GREE (グリー)、2006 年に動画サイトであるニコニコ動画、さらに Instagram が 2010 年に、2011 年には LINE がサービスを開始した。通常、代表的な SNS としては Facebook, Twitter が取り上げられるが、現在のわが国の子どもたちの利用数が多い 3 大 SNS は、LINE, Twitter, Instagram である。この動向を牽引する者たちについて『平成 29 年版情報通信白書』(総務省, 2017) では 20 代のミレニアル世代を挙げているが、鈴木朋子、高橋暁子といったネット記事のライターたちの報告からは、女子高校生たちの SNS 行動がその独特さやロコミでの広がりゆえに、相応のインパクトをもつようにも思われる。

LINE は、携帯メールや mixi に入れ替わる形で子どもたちの間に広がり、リアルな友人や知人との交流や連絡を目的として利用されている。そのため、子どもたちの利用数は突出して多く、友だちと気軽に連絡やおしゃべりができることが魅力とされてきた。2015 年頃のマーケティング会社や研究機関の調査結果によると、中学生・高校生の LINE 利用は、スマートフォン利用者の 70.7~96.9%, アクティブユーザー率は 69.0~92.5% と、ほかの SNS からは突出した利用水準にあった (木村, 2016; MMD 研究所, 2015; リスキーブランド, 2017)。

中学生・高校生の間でこれほど LINE が利用されてきた理由のひとつとして、先述したリアルな友人とのコミュニケーションのほかに、子どもたちの間では学級や部活動の連絡事項が LINE のグループチャットを通じて伝達され、それに対する回答も LINE を通じて行うことが常態化している点が挙げられる。いまや、LINE は子どもたちが仲間と円滑に生活するために不可欠なコミュニケーションインフラになっているとの指摘もみられる (鈴木, 2016; 高橋, 2018)。その一方で、昨今では、「LINE はメールの延長のようなもので SNS ではない」とする調査 (渡辺, 2019) も出現しており、私的なコミュニケーションツールとしての認識が弱まりつつある。

そのような中、LINEでは2020年に「オープンチャット」という機能が追加された。LINEは、そもそもチャット（メンバー同士がリアルタイムで文字による会話を楽しむインターネット上のコンテンツ）を出自とするSNSであることから、SNSではなくコミュニケーションアプリとして分類されることもある。自分が登録した相手、すなわち既知の、特定できる相手との間で個人あるいはグループでの会話ができるもので、それゆえにTwitterなど他のSNSが不特定多数の人々への情報発信や交流という機能をも有するのとは一線を画していた。上述したオープンチャットは、TwitterやInstagramなどと同様に不特定多数の人々との交流を可能にする機能である。LINEはわが国において大多数の人々に利用されているSNSアプリであることと関連して、LINEのみを利用している人々が受動的な情報行動をとる傾向があり、情報の吟味などを積極的には行わないことが示されているが（渡辺，2019）、この群においては小学生や高齢者などのSNS初心者が多く含まれていることに留意が必要である。閉じた集団内でのコミュニケーションツールであったLINEが世界に開かれたことで、今後、LINEのみを利用する情報弱者、特に年少者のトラブルの増加が懸念される。

Twitterは、10代と20代の利用が多く、現実でつながりのある人々との交流に加えて、現実では会ったことのない人々と趣味や好きな事などについて情報交換や交流も行われている。その中でも、中学生・高校生は、リアルな世界でもつながっている人とLINEより「ゆるく」交流し（鈴木，2016）、好きなことや楽しみを共有するツールとしてTwitterを利用しているという。Twitterの利用行動を詳細に検討した北村・佐々木・河合（2016）によると、10代のTwitter利用者は、「自分の暇だという気持ち」（32.8%）を筆頭に、さびしさ、疲れ、自分がなした成果などを「つぶやき」として投稿しているが、その理由において「知ってほしい」「共感してほしい」「いいね」等で承認してほしいなどの項目が他世代よりも高いことが見出されている。一方で、ストレスを感じた時、その発散のために「つぶやく」傾向も10代の特徴として示されている。また、木村（2016）は、10代、20代ではテレビ番組に関してTwitterに投稿する者、Twitterの投稿をきっかけにテレビ番組を見る者が他世代と比較して多かったことを見出しており、子どもたちのテレビ視聴とSNS利用が密接に関連していることが示唆されている。

昨今Twitterにおいても機能拡張が行われている。2020年にInstagramのストーリー機能と同じく24時間で投稿内容が消えるFleetが、そして今後導入されようとしているのが「嫌いボタン」である。これは、賛同や好感を示すリツイートや「いいねボタン」に対して、反対の意思表示できるための機能であると説明されているが、わが国の若い人々のように、Twitterをオン・オフ問わず親しい人との交流や、興味関心好意を共有するための場としている人たちには物議を醸している（鎌田，2020）。

女性を中心に人気が高いSNSであるInstagramは、画像（写真・動画）送信が主のSNSであり、「インスタ映え」「インフルエンサー」などの言葉とともに2016～2017年前後から急速に普及した。サービス開始は2011年とLINEと同じである。爆発的な普及の一因として、ストーリーという24時間限定で投稿内容が消失する機能の気軽さが受けていることをふまえ、TwitterのFleet（2020年11月サービス開始）、LINEでもいったん投稿した内容を24時間以内に取り消せる機能（2017年12月サービス開始）が追加された。Instagramへの言及は2018年頃からネット記事や文献でも見られるようになり、高校生女子を中心に、LINEからTwitter、さらにInstagramのストーリーへ利用が移行し始めているという指摘（鈴木，2018）や、10代（16～19歳）のSNSの利用率として、LINEがほぼ全員、Twitterが約7割、Instagram約5割とする報告も認められる（渡辺，2019）。また、渡辺（2019）がSNSは若い人々にとって情報収集のためのツールと化していると指摘したことと符合して、女子高校生や大学生など若い女性たちは、ファッションやグルメなどの情報収集のツールとしてInstagramを活用している。もはや「ググる」は死語であると述べる女子大学生もいる。

昨今では、ショートムービーを作成し、共有できるアプリ TikTok が小学生など低年齢層を中心に広まっている。動画をアップするのももちろんのこと、動画のやりとりで交流したり、動画のダンスと一緒に踊ったりして遊んだり、オンラインとリアルとを相互還流する形で利用されている。

3 スマートフォンでの交流が加速させる親密さ

子どもたちの SNS コミュニケーションを考えるにあたっては、スマートフォンという機器の影響を忘れてはならない。『平成 29 年版情報通信白書』（総務省、2017）で「スマートフォン社会の到来」が宣言され、10 代のスマートフォン保持率は 8 割を超えた（81.4%、総務省、2017）。子どもたちにおいて、デジタル機器の主演の座はパソコンから携帯電話へ、そして NTT ドコモが iPhone5 の取り扱いを開始した 2013 年に携帯電話とスマートフォンの所持数が逆転した。

先述した通り、わが国の子どもたち（若者も含む）の SNS 利用の事情は世界的動向とはやや異なる面があるが、スマートフォン等のメディアを介して、親密な相手と頻回にかつ長時間つながろうとするコミュニケーションの系譜は、2000 年代初頭に流行した携帯メールへと遡る。この携帯メールの大流行はわが国固有の現象であったことが指摘されている（たとえば木村、2012）。この時代、のべつ幕無しに携帯メールをしている中学生・高校生が注目され、多数の調査研究がなされた。当時の中学生の約半数は携帯電話がないと落ち着かず、携帯メールの返信が 30～60 分以内に返ってこないと不安になったという調査結果もみられ（たとえば高石、2006；矢島、2004）、現在「スマホ依存」と呼ばれているような状態があたりにも再現されたかのようである。ここから、親しい友人との常時接続という子どもたちの状態像は、少なくともわが国の思春期・青年期の子どもたちにおいて、一定の普遍性があることが示唆される。

当時の報告の中で興味深いのは、高橋（2007）の中学生・高校生・大学生の携帯メール利用者とパソコンメール利用者の性行動を比較した研究である。高橋（2007）では、携帯メール利用者のほうが相手との親密な関係の表現として性行動を取りやすいことが見出された。その結果をふまえ、高橋は、携帯電話という機器形態が、当事者間だけのきわめて個人的な、好みや共通の話題などを共有する交流を可能にし、情緒的かつ親密な関係を形成したためだと解釈し、携帯電話には親密加速効果があるとした。この特徴は、同じく 1 対 1 のプライベートなコミュニケーションを主とするスマートフォンにも当てはまるが、現在顕著になってきた特徴もある。SNS では、利用者が自らの意思で情報を選択しながら利用するが、過去の利用履歴等をもとに自動的に情報が選別されて届けられる側面ももつ。すなわち、画面に示される情報は自分好みのものへと精選されており、交流する相手も興味関心や好みが一致する相手であることが多い。その結果、相手との親密さは一層高まると推測される。

実際のところ、子どもたちが、SNS で交流する相手に対して抱いている信頼感は高く、テレビのニュースよりも Twitter から流れてくる情報のほうを信じる、という子どもたちも少なくない。北村ら（2016）は、10 代の子どもたちは、未知の相手も含む自分に対して共感や関心を示す「誰か」の存在を期待して、ささいな所感を発信する傾向にあることを見出し、若本（2019）は、子どもたちが SNS で秘密の情報をやりとりすることは、関係の親密さを反映してのことだと述べている。特に、裏アカウントと呼ばれる自分の素性を隠して興味関心を共有したり、本音を吐き出したりするようなアカウントでのやりとりする相手は、気兼ねをしなければならないリアルな友人よりも一層身近に感じられているのかもしれない。

ところで、現在、SNS でのコミュニケーションのためにスマートフォンから離れられない状態と、インターネットゲーム依存がどちらも「スマホ依存」として混同されているケースが散見される。スマホ依存とは「スマートフォンの使用を続けることで昼夜逆転する、成績が著しく下がるなど

様々な問題が起きているにも関わらず、使用がやめられず、スマートフォンが使用できない状況が続くと、「イライラし落ち着かなくなるなど精神的に依存してしまう状態」のこととされており、SNSに限定されない。アメリカ精神医学会の診断マニュアルであるDSM-5（2013/2014）によれば、「インターネットの過剰使用は、ゲーム、アルコール、薬物などの依存に見られる脳内の報酬系の機能が活性化され、ハイといわれるような快感や興奮がもたらされることに端を発し、耐性がつくことでより多くの物質摂取が必要になり、それを入手しようとして日常生活に悪影響が出てやめられない状態に該当しないため、インターネットゲーム障害とは類似のものとはみなされない」ことが明記されている（pp. 788-790.）。

SNSでのコミュニケーションを理由にスマートフォンから離れられない場合には、携帯メールの場合と同様に、自分だけが取り残される、返事をしないと嫌われるのではないかといった対人的な不安や承認欲求が根底にある一方、ゲームの場合には快感や興奮が依存に寄与している点で大きな違いがあると考えられる。スマホ依存と呼ばれる状態像には多様な状態が含まれていることにも留意が必要であろう。

4 なぜ子どもたちはSNSやアカウントを使い分けるのか

2013年頃「LINEの既読無視（スルー）」「LINEいじめ」「LINE疲れ」などが人間関係のトラブルとして報じられていたが、ここで問題とされていたのは、親しさの加速と常時接続がもたらす人間関係のひずみであった。しかし、今、子どもたちの間では複数のSNS、あるいはひとつのSNSにおける複数のアカウント（インターネットのサービスを利用する際の権利を示す戸籍のようなもの）の使い分けが当たり前になりつつある。

1995年以降、5年ごとに行われている情報行動の2015年時調査において、木村（2016）は、複数のSNSを利用している10代（13～19歳）は72.5%であり、SNS利用パターンで最も多かったのはLINEとTwitterを利用している者42.5%、次がLINEのみの利用者27.4%であったことを報告した。

『平成29年情報通信白書』（総務省、2017）では、ミレニアル世代（20代）に対する聞き取りをもとに、Facebook、Twitter/Instagram、LINEがどのように使い分けられているかについても言及された。それによると、Facebookは、リアルな友人・同僚等の近況（特に人生の節目となるような大きなイベント）を知らせあうツールとして利用し、TwitterやInstagramは自分より上の年代はあまり使っていないので、上の年代の人とやり取りするときに利用するとされた。Twitter/Instagramは、リアルな友人・同僚等と日常のつぶやきや些細な出来事をやり取りするのに利用していること、ネット上で知り合った人（会ったことない人）と、自分の趣味や好きなものの情報交換をするのに利用しているとされた。そして、LINEはリアルな友人・同僚等との会話やメールの代わりとして利用しているとされた。さらに、NHK放送文化研究所が2018年に実施した「情報とメディア利用に関する調査」によると、TwitterやInstagramなどのSNSは、自分にとって興味関心のある情報収集のためのツールとして利用されるなどその用途が拡大しており、暇つぶしや楽しさなどの理由とあわせて、20代以下の若者のメディア行動の中心的存在にあることが示された（渡辺、2019）。

10代の子どもたちが複数のSNSやアカウントを使い分ける理由としては、メッセージの受信者が不快に思わないよう配慮して、相手やテーマ別に発信元を複数もつためという報告が多い。たとえば、アエラ（2017）によれば、ある女子高校生は、相手の反応を予想しながら返信を考えるのが苦痛であるため多数のLINEのメッセージを未読スルー（メッセージを読まないまま放っておくこと）しているが、Twitterでは自分の本音を吐き出しているという。Twitterはアカウントを複数設定できる。本名を公開しているアカウントや、匿名で趣味専用のアカウントなどを使い分け、各々の場に応じて投稿内容を変えながら、交流を楽しんでいるようだ。

しかし、鈴木（2018）では、女子高校生の中でTwitterよりもっと気軽に投稿を楽しめるInstagramのストーリーズを使用する傾向が広がっているとされた。LINEからTwitter、さらにInstagramのストーリーズへと相手を束縛せず、自分の発言も24時間で消えてなくなるSNSへと利用が移行している状況は、親しい友人との緊密すぎる関係や交流、それに伴うわずらわしさや衝突を、SNSを使い分けることで回避しようとしているようにも見える。この現象は、携帯メールに始まりLINEの隆盛期にかけて見られた親しい友人と常時接続し続けようとする情報メディアを介した対人行動から、異なる段階のSNS行動とも呼べる独自の行動へと移行し始めている、ということかもしれない。その背景には、スマートフォンやSNS利用の悉皆状態がもたらす「慣れ」が関与していると考えられる。

5 SNS コミュニケーションと親密さの変容との関連

子どもたちにとって友人関係が最も重要であることは今も昔も変わりはない。だが、相手には求めるのに、相手から求められると戸惑う、友人とのつながりを求めているはずが同期的な対話は面倒だと思ふといったSNS上の両価的な行動もまた報告されている。木村（2012）は、SNS等インターネットコミュニケーションを質的に分析する中で、若年であるほど、心が動かされた程度（テンション）を共有するだけで、相手を親しいと認識する傾向があることを見出している。土井（2004）は、子どもたちが「むかつく」などの生理的・感覚的表現を多用するのは心の状態を言葉にして表現することに意味がないと思っているからで、親密さを高めるコミュニケーションには感覚的な一体感が好まれることを示唆した。SNSは、ごく短文のメッセージと画像を投稿し、共感や承認もボタンひとつで手軽にかつ頻繁に「いいね！」で示したり受け取ったりすることができ、テンションの共有を容易にする。SNSの仕様は、子どもが親密さを高め合うコミュニケーション様式に驚くほど適している。

一方で、土井（2004）は、感覚に依存して成立する自己をもつ者は持続性と統合性に問題をはらむために不安定であり、親しい友人からの承認を絶え間なく求めざるを得ないことを示唆した。また、岡田（2007）は、傷つけ・傷つきの可能性がある深い付き合いは回避しながらも、友人と話を合わせつつ楽しく快活に過ごす「群れ志向」の友人関係をもつ青年の自己概念は相対的に未熟であり、相手への気遣いも相手のためというよりは、他者からの承認を得て自己肯定感を保つためのものであることを見出した。高校生のLINE利用時の認識と友人関係との関連を定量的に検討した時岡ら（2017）においても、相手からのメッセージに即返信しなければと考えるのは、相手から傷つけられることを回避するためであり、相手を傷つけないとの思いとは無関係であったことが示されている。

この傷つけられることを回避する態度を、自己愛の一形態とする見方が、現在の心理学では主流である。自己愛というと傲慢で自己顕示的な心理特性と見なされてきたが、Gabbard（1994/1997）により、自己愛には周囲を気にかけないタイプと、周囲の人々の反応を過剰に気にかける、自己抑制的で傷つきやすく羞恥や屈辱を感じやすい「過敏型」タイプとがあり、2つは連続しているという考え方が示された。「過敏型」の人は、常に他者からの肯定的な評価を待っている状態にあり、自己肯定感が他者からの否定的な評価によって崩れやすい「もろさ」をもつという特徴がある。その一方で、心の底には自己を顕示したい欲求が潜んでおり、周囲からの特別な配慮を期待しているという（上地・宮下、2004）。相手から傷つけられないよう最大限の注意を払いながらも、相手を断片化し、自分にとって好ましい部分とのみ親密な関係を築き、共感や承認を求める子どもたちの姿の説明として納得がいくものである。しかし、自己愛的な心性とSNSコミュニケーションの因果関係はまだ不明である。

子どもたちのコミュニケーションの変化は、「親しさ」だけでなく「関係」の意味も変容させてい

るように思われる。親密さとはそもそも関係の質を表す言葉だが、今の子どもたちにはやりとりがうまくいくこと（たとえば「テンション」を共有し楽しめた）で親しさが担保されることから、人間同士の「関係」や包括的な存在としての「対象」「相手という人間」に対しては消極的であるように見える。「推し」と称される自分が好きな人物やキャラクターなどを、「推し」が共通するメンバー内で局所的にやりとりするコミュニケーションのあり方や、SNS コミュニケーションでトラブルがあった場合、アカウントを削除したり、フォローを外したりする、関係の再構築よりも回避を選択する対人態度（アエラ，2017）、Twitterで特定ではない「誰か」からの共感や承認を期待する10代利用者の姿（北村ら，2016）は、特定の対象との緊密かつ深い「関係」は回避しつつ、やりとりにおける感覚的で心地よい「親密さ」を求める友人関係のありようを映し出しているように見受けられる。相手に関心がない話をすることで不快な思いをさせてしまうことを避けるために複数のアカウントを使い分けていることもまた、傷つき・傷つけを避け、感覚的で心地よい関係を維持しようとする営みであると考えられる。

Ⅲ 子どもたちはどのような SNS トラブルに遭遇しているか

1 子どもたちの SNS トラブルの実態

子どもたちのインターネットいじめや SNS 上のトラブルが、ネット社会の負の側面として問題視されている。文部科学省が毎年報告している「子どもたちの問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題」において、いじめの一態様としての「パソコンや携帯電話等で、ひぼう・中傷や嫌なことをされる」の認知報告件数は、平成28年度10,779件、平成29年度12,632件、平成30年度16,334件、令和元年度17,924件と確実に増加している。

また、SNS 上のトラブルに関して、総務省（2015）による『平成27年版情報通信白書』では、全世代でのトラブル経験者は15.4%である中、20代以下（13～29歳）世代では26.0%と全世代中最多であったことが報告された。トラブルの内容としては、平成27年度、および同じ形式の報告がなされた平成30年度いずれにおいても「自分の発言が自分の意図とは異なる意味で他人に受け取られてしまった（誤解）」「自分は軽い冗談のつもりで書き込んだが、他人を傷つけてしまった」「ネット上で他人と言ひ合いになったことがある（けんか）」「自分の意思とは関係なく、自分について（個人情報、写真など）公開されてしまった（曝露）」が上位項目であった。

2 子どもたちの SNS トラブルの根底にあるもの

今の子どもたちはデジタルネイティブとも呼ばれる。さまざまなデジタルスキルを使いこなせる反面、セキュリティリスクやトラブル対処に関する知識が不足していることが世界的にも指摘されており（boyd, 2014/2014；OECD, 2012）、リテラシーは決して高くない。つまり、インターネットを使いこなすことはできるものの、インターネットを十分に理解できていないわけではない。子どもにとって SNS やインターネットはあって当然のものであり、その成り立ちや仕組みに対する関心が湧きにくいためであろう。

子どもたちの SNS トラブルを理解するにあたってより重要なのは、子どもの SNS 利用では友人とのつながりが最優先されるため、友人と楽しい交流をより活発に行うのに要するスキルの習得には熱心でも、セキュリティリスクやトラブルへの安全な対処法には相対的に無頓着だと考えられることである（鈴木，2016も同様の指摘）。Dooley, Cross, Hearn, & Treyvaud (2009) は、友人とつながっていることを重視する子どもは、画像を含む個人情報をより多く漏らす過剰共有のリスクが高いことを示した。また、若本（2016）は、小・中学生に比べてデジタルスキルが高いはずの高校生

が、LINEトラブルの加害・被害両方の経験値が有意に高く、個人情報漏洩や対人トラブルを根拠なく「大したことない、何とかなる」と楽観視していることを見出した。この態度は、木村（2016）が見出した10代・20代が多いTwitter利用者の「明日は明日で何とかなる」という刹那主義的態度、「インターネットではその手のリスクは当然」として「問題」と見なさない態度（田中・山口，2014）とも符合する。Twitter利用時において10代だけがストレスを感じた時に憂さ晴らしとしてつぶやく特徴があるのも（北村ら，2016）、インターネット上の事象が現実には及ぼす影響を過小評価することによって生じていると考えられる。

このように、子どもたちはSNSを含むインターネット空間の特性——話したこと（投稿した情報）がインターネット空間では永久に残り続けること、どんな情報も簡単に「検索」されてしまうこと、インターネットというシステムは元来拡大・拡散という方向性をもっており情報の秘匿が難しいこと——を、真には実感できていないようである。コンサルテーションや研修の場でも、実に素朴な、現実とネットを混同したトラブルの報告を受けることが多々ある。たとえば、自分たちの仲間内の「秘密」として公開のアカウントでやりとりしていた出来事を、教師が見聞きしたとあって「覗き見るなんて信じられない」と怒ったりする。そのほかにも、SNS上の会話が、現実場面での会話のようにその場限りで消えてしまうものであるかのように思っている小学生、SNS上の会話が、スクショによって、友だちの友だちである見知らぬ他人にまで拡散しうることを想像すらしていない中学生、自分のスマートフォン画面にあるアプリを削除すれば、これまで発信してきた情報もすべて削除できたと思いついでいる高校生などの報告もあった。このような傾向は、認知発達が未熟な幼い子どもたちや、発達の遅れやばらつきのある子どもたちにより顕著であり、特別支援学校教員からの相談も少なくない。

このような事態は、インターネット利用者として子どもが想定されていなかったことと関連している。インターネットは、研究者が研究者コミュニティ内でデータのやりとりをするために開発され、学術用のネットワークとして始まった。1960年代から1990年代頃の先駆的な利用者は、コンピュータの知識を相当もつ人々であった。2000年代に入り、SNSを中心とするソーシャルメディアが急速に発展していく中で、利用者は単なる情報の受け手ではなく、情報の作成、発信、共有の主体となった。このような歴史的背景から、インターネット空間は、利用者一人ひとりが能動的な表現者として大きな力を持つ世界であり、情報選択や関係調整の力が「個人」の責任として求められる（Rainie & Wellman, 2012）。現在、インターネットを有効活用できるかどうかは個人のスキル次第であり、オンライン（インターネット）とオフライン（現実）をどの程度重ねて利用するかは個人の選択に委ねられる段階になったと言われているが（北村ら，2016）、子どもたちが認知・社会情緒の発達途上にあり、それがトラブルの誘因になりうることは考慮に入れられていない。

3 教師が報告する子どもたちのSNSトラブル：2020年10月のオンライン調査から

発達途上にある子どもたちのSNS利用を懸念し、トラブルへの対応を迫られているのが教師たちである。2020年10月、これまでに経験した子どもたちのSNSトラブルについてオンライン調査を行い、教師89名から回答を得た（複数回答可）。なお、本調査は本学研究倫理審査を受け実施された。

調査の結果、150件を超えるトラブルが報告された。主な内訳は、対人関係や対人コミュニケーションのトラブル：小学生32件、中学生35件、高校生12件、危険なサイトの閲覧／ポルノグラフィ等のコンテンツの送信・拡散／個人情報漏洩トラブル：小学生9件、中学生18件、高校生21件、オフラインでの接触や出会い系でのトラブル：小学生3件、中学生6件、高校生7件の報告があった（学校段階が不明のものはカウントしていない）。なお、SNSとは異なるがオンラインゲームにかかわるトラブルについても報告がなされ、小学生6件、中学生6件、高校生3件であった。

2010年代半ばのSNSトラブルに関する研究では、高校生と中学生・小学生との間にはトラブル経験数に圧倒的な違いがあった（たとえば若本，2016）。しかし、今回の教師たちの報告をみると、小学生・中学生の間にもSNSトラブルが広がっていることが明らかである。興味深いのは、小学生のトラブル報告数が最も多かった対人関係や対人コミュニケーションのトラブルのほぼ全部にLINE利用が関連しており、その内容が、LINEトラブルが報告され始めた2013年頃の状況に極めて似ていたことである。換言すれば、高校生、中学生を後追いする形でLINEの利用を始めた小学生たちは、トラブルの面でも先輩たちを後追いつているようである。

一方、高校生や中学生に関するトラブルでは、性的コンテンツへの曝露や性的搾取（裸の写真を求められて送る、交流していた相手がストーカー化するなど）をめぐるものが数多く報告された。今回はあくまでも教師の報告であることから、報告数の多さはトラブルの実数とは一致しない。性的問題がもつインパクトの大きさが報告数に影響を与えている可能性もある。しかし、いずれにしても今、教師たちが高校生や中学生のSNSトラブルとして最も懸念しているのは性的問題だと言えるだろう。

海外では、SNSやインターネットで性的な画像や文章をやりとりすることをSextingとして研究が進められている。たとえばMadigan, Ly, Rush, Van Ouytsel, & Temple (2018)のメタ分析結果によると、性的なコンテンツを送った者は2割弱、受け取った者は3割弱であり、Sextingは10代半ばの子どもたちに比較的普通のこととして認知されていた。また、オンラインでのSextingが現実の関係ややりとりにも波及することや(Ringrose, Gill, Livingstone, & Harvey, 2012)、性的コンテンツのやりとりを拒否すると「お高くとまっている」と見なされ、恋愛・友人関係の悪化につながる(Lippman & Campbell, 2014)といった報告もなされている。これらが要因となって、本音のところでは性的コンテンツを送るのがイヤでも、断ることができない状況が生み出されていると考えられる。今回教師たちから報告されたトラブルにおいても、「断ろうにも相手に悪くて、あるいは相手に押し切られて断れなかった」「相手の関心をひいたり気持ちを繋ぎとめたりするために自身の性的画像を送った」という例が複数報告されていた。一見した性的トラブルの根底に、子どもたちの自分を理解してくれる親密な相手への希求があることを見逃してはならないだろう。

IV おわりに

本稿では、わが国の子どもたちに急速にSNSが浸透していった2010年代の動向について整理してきた。2020年現在、新型コロナウイルス感染症が世の中を大きく変えつつある。リモート勤務やオンライン授業が当たり前のものとなり、SNSの課題としては、匿名性を背景とした攻撃や炎上が目目されている。この動きが今後とも継続するのか、また子どもたちにどういった影響を与えるのか、引き続き検討を重ねていく必要がある。

文献

アエラ (2017). LINE返信が面倒すぎる！「未読スルー」の女子高生たち

<https://dot.asahi.com/aera/2017081500021.html> (2017年8月17日リリース)

American Psychiatric Association (2013). DSM-5. (高橋三郎・大野裕 (監訳) (2014) 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)

Bandura, A. (2016). Moral disengagement. New York: Worth Publishers.

boyd, d. (2014) It's complicated: The social lives of networked teens. New Haven: Yale University Press. (野中モモ (訳) (2014). つながりっぱなしの日常を生きる：ソーシャルメディアが若者にもたら

したもの 草思社)

土井隆義 (2004). 「個性」を煽られる子どもたち：親密圏の変容を考える 岩波書店

土井隆義 (2014). つながりを煽られる子どもたち：ネット依存といじめ問題を考える 岩波書店

Dooley, J. J., Cross, D., Hearn, L., & Treyvaud, R. (2009). Review of existing Australian and international cyber-safety research. Child Health Promotion Research Centre, Edith Cowan University.

http://www.dbcde.gov.au/_data/assets/pdf_file/0004/119416/ECU_Review_of_exsisting_Australian_and_international_cyber-safety_research.pdf

Gabbard, G. O. (1994). Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM- IV edition. Washington D.C.: American Psychiatric Association. (舘 哲朗 (監訳) (1997). 精神力動的精神医学：その臨床実践 [DSM- IV版] ③臨床編：II 軸障害 岩崎学術出版社

鎌田倫子 (2020). 「嫌いボタン」で若者の Twitter 離れが加速？ 匿名の悪意を香山リカさんと考えた AERA dot.

<https://dot.asahi.com/dot/2020112400082.html?page=1>

上地雄一郎・宮下一博 (編著) (2004). もろい青少年の心—自己愛の障害—発達臨床心理学的考察 シリーズ・荒れる青少年の心4 北大路書房

木村忠正 (2012). デジタルネイティブの時代 平凡社

木村忠正 (2016). ソーシャルメディアと動画サイトの利用 橋元良明 (編) (2016). 日本人の情報行動2015 東京大学出版会 pp. 143-179.

北村 智・佐々木裕一・河合大介 (2016). ツイッターの心理学—情報環境と利用者行動 誠信書房

Lippman, J. R., & Campbell, S. W. (2014). Damned if you do, damned if you don't...IF you are a girl: Relational and normative contexts of adolescents sexting in the United States. Journal of children and media, 8(4), 371-386.

Madigan, S., Ly, A., Rush, C. L., Van Ouytsel, J., & Temple, J. R. (2018). Prevalence of multiple forms of sexting behavior among youth: A systematic review and meta-analysis. JAVA Pediatrics, 172(4), 327-335.

MMD研究所 (2015). 2015年版：スマートフォン利用者実態調査.

https://mmdlabo.jp/investigation/detail_1511.html

文部科学省 (2018). 平成28年度「子どもたちの問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(確定値)

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/01/10/1412082-28.pdf

文部科学省 (2018). 平成29年度「子どもたちの問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/10/25/1412082-29.pdf

文部科学省 (2019). 平成30年度「子どもたちの問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」

<https://www.mext.go.jp/content/1410392.pdf>

文部科学省 (2020). 令和元年度「子どもたちの問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」

https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf

中橋 雄 (編著) (2017). メディア・リテラシー教育—ソーシャルメディア時代の実践と学び 北樹出版

- 西川勇佑・中村雅子 (2015). LINE コミュニケーションの特性の分析. 東京都市大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル, 16, 49-59.
- 岡田 努 (2007). 大学生における友人関係の類型と, 適応及び自己の諸側面の発達に関連について パーソナリティ研究, 15, 135-148.
- Rainie, H., & Wellman, B. (2012). Networked: The new social operating system. Cambridge, MA: MIT Press.
- リスクブランド (2017). 生活意識調査 MINDVOICE 調査生活者分析 SNS 利用者動向
http://www.riskybrand.com/topics/report_170510.pdf
- Ringrose, J., Gill, R., Livingstone, S., & Harvey, L. (2012). A qualitative study of children, young people and “sexting”: A report for the nspcc London, UK. NSPCC.
- 総務省 (2015). 平成27年度情報通信白書
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/pdf/index.html>
- 総務省 (2017). 平成29年度情報通信白書
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/pdf/index.html>
- 総務省 (2020). 令和2年度情報通信白書
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r02/pdf/index.html>
- 鈴木朋子 (2016). 中高生がLINEとTwitterを使い分けるワケ: なぜ彼女たちは個人情報を載せるのか <http://toyokeizai.net/articles/-/126274>
- 鈴木朋子 (2018). 女子高生の「ツイッター離れ」が進行する必然—SNSの使い方が変わり始めている <http://toyokeizai.net/articles/-/209187>
- 鈴木朋子 (2020). 10代に人気の位置情報共有アプリ「Zenly」ってなに? <https://japanese.engadget.com/jp-2020-03-03-10-zenly.html>
- 高橋暁子 (2018). なぜ? LINEからも逃げ出し始めた若者たち: 深読みチャンネル 読売新聞 (YOMIURI ONLINE)
<http://sp.yomiuri.co.jp/fukayomi/ichiran/20180117-OYT8T50016.html>
- 高橋暁子 (2019). 女子高生が「Zenly」で現在地を公開しあう理由
<https://japan.cnet.com/article/35134797/>
- 高橋征仁 (2007). コミュニケーション・メディアと性行動における青少年層の分極化—携帯メールによる親密性の変容 財団法人日本性教育協会 (編著)「若者の性」白書: 第6回青少年の性行動全国調査報告 小学館
- 高石浩一 (2006). 思春期・青年期の間関係—メディアの影響を中心に 伊藤美奈子 (編) 思春期・青年期臨床心理学 海保博之 (監修) 朝倉心理学講座16 朝倉書店 pp. 42-58.
- 田中辰雄・山口真一 (2016). ネット炎上の研究: 誰がおり, どう対処するのか 勁草書房
- 時岡良太・佐藤 映・児玉夏枝・田附紘平・竹中悠香・松波美里・岩井有香・木村大樹・鈴木優佳・橋本真友里・岩城晶子・神代未人・桑原知子 (2017). 高校生のLINEでのやりとりに対する認知に現代青年の友人関係特徴が及ぼす影響 パーソナリティ研究, 26, 76-88.
- 若本純子 (2016). 子どもたちのLINEコミュニケーションをめぐるトラブルの実態と関連要因—小学生・中学生・高校生を対象とする質問紙調査から— 佐賀大学教育実践研究, 33, 1-16.
<http://portal.dl.saga-u.ac.jp/handle/123456789/122605>
- 若本純子 (2018). 児童生徒のSNS利用と友人関係との関連—情報モラル教育を始める前に 西野泰代・原田恵理子・若本純子 (編著) 情報モラル教育—知っておきたい子どものネットコミュニケーションとトラブル予防 金子書房 pp. 3-21.
- 若本純子 (2019). SNSにおける秘密とは—子どもと大人の違いから 児童心理「特集・子どもの秘

密」1065, 57-61. 金子書房

若本純子・西野泰代・原田恵理子(2017). 高校生のLINEいじめにおける加害・被害・傍観行動と心理的要因との関連—現実との連続性に注目して— 佐賀大学教育学部研究論文集, 2 (1), 223-235.

http://portal.dl.saga-u.ac.jp/bitstream/123456789/123316/1/wakamoto-1_201708.pdf

渡辺洋子(2019). SNSを情報ツールとして使う若者たち—「情報とメディア調査」世論調査の結果から②— 放送研究と調査, 69, 38-56.

https://www.nhk.or.jp/bunken/research/domestic/pdf/20190501_6.pdf

矢島正見(編)(2004). 青少年の意識・行動と携帯電話に関する調査研究報告書 警察庁生活安全局少年課